

拠点形成研究交流報告：Wageningen University (WUR) を訪問して

JSPS 研究拠点形成事業の研究交流として、5月上旬に Wageningen University・Institute of Animal Sciences (WIAS) を訪問した。また、ベルギー・レーベントリック大学 (KU Leuven) への訪問や、スペインで開催されたヨーロッパ家禽栄養シンポジウム2017 (ESPN2017) へ参加し、抗生物質に頼らない次世代家禽生産について情報交換を行った。

WIASでは、昨年度東北大学農学部を短期訪問された Geert Wiegertjes 博士より紹介いただいた、Rene Kwakkel 博士と情報交換を行った。Kwakkel 博士は家禽科学を専門とし、菜種粕など消化性が低い飼料原料を利用するための栄養学的研究や有機酸添加による腸管免疫賦活化技術の開発など、実用利用を主眼にした研究を行っている。同博士とのディスカッションは渡欧直前に決まったため、事前の打ち合わせが十分にできなかった中で交流となったが、私が昨年発表した幼雛期ニワトリの腸管自然免疫に関する論文に大いに興味を持っていただき、初顔合わせにも関わらず、濃密な討論が出来た。また、博士課程の大学院生の発表を聞く機会も設けていただき、学生でありながら、現在の家禽業界が抱える問題について深く思索している点や、自身の研究がその問題に対して具体的にどのように貢献できるか思いを巡らせている点など、WURの学生の優秀さを垣間見た。WIASへの訪問を通じて、研究討論はもとより将来目標とすべき研究教育機関モデルを肌で感じることができ、研究のみならず学生教育の面でも大きな刺激を受けた。



WIASを訪問した後、KU Leuvenを訪問した。同大学では、Kwakkel博士と同様にヨーロッパの家禽科学の第一線で活躍する Johan Buyse 博士と面談し、家禽生産における自然免疫の重要性や、自然免疫能を破綻させる暑熱ストレスならびにその制御法について情報交換を行った。続いて向かったスペインでは、ESPN2017に参加し、家禽栄養学の最新知見を得た。ヨーロッパでは抗生物質に頼らない畜産物生産への意識が非常に高く、同シンポジウムでも天然の添加剤や機能性物質をいかに上手く利用し、健全な鶏肉生産を実現するかといった講演が多数を占めていた。シンポジウムでは、萌芽的な研究から飼育現場で実際に普及されつつある実用レベルの研究にいたるまで、幅広い議論が活発に行われた。これからの家禽生産において、飼料栄養のみならず添加物や飼料形状を利用した腸管・腸内細菌叢の健全性つまり免疫能向上も重要なポイントであることを知ることができた。

今回のWIASを初めとした複数の研究拠点・研究者との交流を通じて、薬に頼らない畜産物生産をいかに構築していくか、さらにこの先導役を担う人材をどのように育成するか、ラボワークのみならず実用利用の視点の重要性を痛感した。今回得たことを今後の研究

・教育に活用していきたいと考えている。この度の国際交流に対する研究拠点形成事業の研究交流支援に深く感謝する。 文 食品評価ユニット・喜久里基